

SDGs の達成に向けた共創的研究開発プログラム（シナリオ創出フェーズ）

令和 4 年度採択プロジェクト 事後評価報告書

2025 年（令和 7 年）3 月

研究開発プロジェクト名：離島の発達障害児医療におけるアバターロボットの活用支援体制の構築

研究代表者：永田 康浩（長崎大学大学院医歯薬学総合研究科 教授）

協働実施者：熊崎 博一（長崎大学病院地域連携児童思春期精神医学診療部 診療部長）

実施期間：2022 年（令和 4 年）10 月～2025 年（令和 7 年）3 月 ※期間延長

総合評価

成果は得られたが限定的であると評価する。

本プロジェクトは、通常診療にアバターロボットを同席させ、専門医が不在の状況においても患者・家族・医師間が安心して診療できる環境を創り上げるとともに、発達障害児支援の新たなアプローチとして、その成果を福祉、教育などの多分野と共有し、アバターロボットを用いた診療技術の利用性拡充に結び付けることを目指すものである。

研究代表者、自治体、福祉事業所において精力的に取り組まれ、受益者・支援者・医療従事者・福祉従事者が何を考え、何がアバターロボット導入のハードルであるかについて、多角的な視野が得られたことは評価する。一方で、根幹となる技術シーズが開発未了のため、ロボット活用の効果、意義、意味などの考察までは示されなかった。また、児童や保護者の受け入れに対する評価と、導入による支援効果の評価が未了のため、これからの展開も見えにくい。今後は、可能性試験で得られた患者保護者や地域関係者同士のネットワーク、研究開発中に確認されたロボットと発達障害児との親和性などを生かし、技術支援体制をより盤石にした上で、本取組みが継続されることを期待する。

項目評価

1. 目標の妥当性

目標は妥当であったと評価する。

SDGs の「誰一人取り置き去りにしない」という理念のもと、離島における障がい児支援という社会課題への目標設定は妥当であったと評価する。離島での発達障害児支援体制の整備のために、アバターロボットの導入による波及効果を測定すること、システム運用の環境を検証し「発達障害児支援のための連携会議」を発足するという目標も重要かつ妥当であった。一方で、導入ツールの選定、プロジェクト推進のための協働体制づくりに時間を要した印象がある。また、発達障害においては、医療のみでは生活や教育における多様な課題の解決に必ずしも繋がらないため、課題設定の時点でそれに即した目標設定ができていれば、より道筋が具体的になり、実証がさらに進んだ可能性があったと考えられる。

2. 研究開発プロジェクトの目標の達成状況および研究開発成果

プロジェクトの目標は限定的に達成されたと評価する。

発達障害児支援に関わる専門職の協議の場づくりが 9 回行われ、顔の見える関係性が構築された点は評価するが、定例開催とはならず、将来的な道筋は示されなかった。また、発達障害児の治療においてロボット活用が有効であることは確認出来たが、治療上の優位性は確認出来なかった。可能性試験も福祉事業所において限定的に実施されたが、複数の二次離島への展開には至っておらず、目的達成は限定的であったと考える。様々な技術導入にあたっての心理的課題やそれを克服する離島側の人員的課題などが明らかになった点は評価でき、今後、これらの解決策が見いだされることを期待する。

3. 研究開発プロジェクトの運営・活動状況

プロジェクトの運営・活動状況は、妥当性は限定的だったと評価する。

COVID-19 感染症拡大下で、療養施設での実証を先行させるなど、成果に向けて柔軟に対応した点を評価する。ステークホルダーが持つ「ロボットへの不安・懸念」に関して、逃げずに向き合っており取り組んでいた。一方で、研究代表者や自治体、福祉事業所における取り組みは精力的に実施されたものの、技術シーズが開発未了であり、その主担当である協働実施者のエフォートが十分に得られていなかったことは課題である。アバターロボット支援関係の人材そのものの不足は否めず、これを補充し、本来の目的に沿った成果が生まれることを期待する。

4. プロジェクト終了後の事業構想(研究開発成果の活用・展開の可能性)

プロジェクト終了後の事業構想は、描けているが限定的と評価する。

アバターロボットの活用の仕方は様々な可能性があり、今後の展開を構想する材料としては多くを得られた。アバターロボット導入の効果について明確なアピールをするとともに、多地域展開を含めて、アバターロボット導入を推進・加速するための具体的な方策の提示に繋がることを期待する。発達障害児支援には、医療に加え、保健、福祉、教育等の多分野が関わり、連携して支援していくことが理想であり、既存ネットワークや関係性の力を十分引き出せなかった背景を検証し、現場のニーズにあった支援へと、さらに展開することを期待する。

5. その他

なし